

## 佐々木正五先生－追悼の言葉

お ざわ あつし  
小 澤 敦  
Atsushi OZAWA

平成 26 年 11 月 20 日午前 9 時頃佐々木正五先生（慶應義塾大学名誉教授、東海大学名誉教授）がお亡くなりになったという電話があり、私は大きな衝撃を受け、発する言葉を失いました。昨年 6 月には先生の白寿をお祝いする会、11 月には百歳長寿祝賀会があり、参加した多くの方々からの祝福を受けられ、先生は非常にお元気で歓談されておられたのに、突然の先生の訃報に接し、茫然自失の状態になりました。

先生は 1941 年慶應義塾大学医学部を御卒業になり、直ちに伝統ある母校の細菌学教室において研究の第一歩を踏み出されました。その後海軍の軍医として 4 年間勤務し、1945 年に終戦となり再び細菌学教室に復帰されました。当時細菌学教室を主宰しておられたのは、初代医学部長の北里柴三郎先生の下門下生であり、宿主寄生体関係を基盤とした感染、発症論の偉大な先覚者としての知名度の高い小林六造教授でありました。佐々木先生は、この小林先生の研究哲学に強く魅せられ、常在細菌叢と腸粘膜面とのかかわり合い、即ち腸粘膜の有機体化という奥の深い研究テーマへの挑戦が始められたのです。この研究はその後無菌生物学的視点を導入した形で展開されて行き、生物間の共存（情報の共有）という概念の誕生となり、相関微生物学的研究の重要性が強調されたのです。そして先生は 1970 年に「常在菌叢の生物学的意義」という研究が評価され、小島三郎記念文化賞を受賞されました。この賞は 1965

年日本栄養化学株式会社（現栄研化学）の初代社長黒住剛氏により創設されたものであり、現在迄に受賞者 50 名に達しております。また 1955 年（昭和 30 年）モダンメディアという技術者向けの小雑誌が誕生しましたが、これも黒住剛社長の英断によるものですが、この創刊号の発行には佐々木正五先生の方が大きな役割を果たしていたことも見逃すことは出来ません。昨年モダンメディアは発刊から 60 年を迎えましたが、発刊当時の編集委員は海千山千の勇者、毒舌家の集まりで、雑誌の裏表紙の随筆は特に有名で面白く、中身より裏表紙しか読まない不心得者も多く見られた様で、私もその中の一人でありました。編集委員の中でも特に佐々木先生の随筆は面白く、ここにその一文を御紹介することに致したいと思います。

### 「校 正」

衛生検査指針なるものが世に出て 20 年近くもなろうか。立派な意図と計画のもとに始められたものだろうが、いつのまにか不思議なものになってきた。

最低限の要求、とされていたものが、今日では最高のものになった所もあるらしい。例えば食品検査は指針に定められたものが絶対で、これ以上どんな良い方法があっても法的には無価値らしい。

昼寝の枕代りに持出した指針を、閑にまかせて、パラパラと眺めている中に、校正を依頼されているかのような錯覚におちいった。

神武天皇御制定の方法かと思われる程旧態依然たるものがある。これは検査史針のミスプリントらしい。

新しい方法があっても、そんなものは禁止するかの如きところがある。これは検査止針と改めるべきかな？

自信の無さそうな書きっ振りで、読者の顔色をうかがいつつ、くだ〜と述べてあるものがある。検査伺信としておこう。

実際を知らずに、専らペーパーワークに終わったものは、検査紙針とせねばなるまい。

よく判らんが、まあやってみるか？ 式のものもある。検査試針がよかろう。

美辞麗句とまでは行かぬが、いささか散文的過ぎるものがあり、検査詩信がよい。

甚しきは、検査私信まがいのものもある。

致し方なし、全体の題名も変えよう。

衛生検査死針 と。

(昭和38年8月10日発行モダンメディア第9巻、第8号掲載)。

それにしても、最近の盲談メディア(モダンメディアを皮肉った佐々木先生用語)の裏表紙の随筆は余り面白味に欠けるので、随筆が面白味に欠けるという裏表紙を書こうじゃないか、などと佐々木先生と二人で話し合ったことがありました。放談相手の私の恩師である佐々木先生が突然天国に旅立たれたことは誠に寂しい限りです。

私と佐々木先生とが研究面を通して人間的接触が濃密になったのは、1962年頃からでありました。先生は常に自由な研究、討論の場を与えて下さり、懐の深い包容力があり、細かな気遣いをされる一方で、ユーモア的毒舌家でもありました。佐々木先生は、口が悪い、毒舌というのは親しさの1つの変形したものと言われ、実例をあげて説明さ

れております。それは予研(予防衛生研究所、現感染症研究所)の所長であられた福見秀雄先生(故人)の退官記念の会があり、私も出席しましたが、その時佐々木先生と、先生の親友である小酒井望先生(故人、当時は順天堂大学医学部教授)とが、かけ合い漫才的司会をされ次の様なやりとりがありました。

小酒井先生開口一番「よう、正五、まだ生きとったか!」「正五よ、もっと学問にいそしめよ!」「お前さんは風格はあるが、人格が問題だ」などとやられると、佐々木正五先生は、すかさず「おお小酒井、お前さんは常識はあるが、学識がないので困る」といった調子でお互いに会話を楽しんでいるのです。後日福見秀雄先生が佐々木君と小酒井君の仲は、日頃から漫才的であり、酒宴の席で両君の漫才が座持ちをして会が進行し、両君が互いに相手をこき下すような論議を展開しながら、しかも会そのものはなごやかな雰囲気をかもし出していた、と話されておりました。

1974年に佐々木先生は慶應義塾大学医学部微生物学教室の教授を辞し、乞われて新設された東海大学医学部の初代医学部長に就任されました。と同時に私も同医学部の微生物学教室を担当することになりました。佐々木先生は「名医より良医を」、「科学とヒューマニズムの調和」という旗印の下、18年間の長きに亘り医学部長の職にあり、いくつかの新機軸を打ち出し、持前の敏腕を振るわれ医学部の基盤を築きあげられました。従来の旧態然とした講座制を廃止し、基礎医学と臨床医学の有機体化、各専門領域間の連携強化を推進し、これを基本とした教育、研究、診療体制を構築したのです。無菌病棟設置による難病の新治療法の開発などのプロジェクト研究が推進され、国際的にもその実績は高く評価されております。画一的既成概念を捨ててグローバルな視点からの学際領域の統合など、共存の医学こそ東海大学医学部の進むべき道であると訴え続けてこられました。

また佐々木先生は国際交流にも積極的に取り組まれ、ニューヨーク医科大学、ボーマングレー医科大

学、ロンドン大学などとの学生交換教育にも力を注ぎ、大きな成果を挙げられました。先生は国際微生物学会連合 (IUMS) 会長、国際無菌生物学会プレジデントをはじめ数多くの要職を歴任してこられました。これは先生の備えておられる先見性、洞察力、決断力、行動力などの総和としての知力によってもたらされたものであると思っています。

先生の卓越した人間管理術は天賦の才であり、緩急おりませた絶妙の投球術に翻弄されて来た私ですが、私も自由な研究、討論の場が与えられ、やりたいことをやらせて貰い、言いたいことを言わせて戴いたのは、先生の器量の大きさによるものと感謝しております。

先生は司馬遼太郎さん(故人)とも親交があり、幅広い人脈を持っておられたことが、先生の豊かな発想力を生み出し、また懐の深い包容力となり、それが人間的魅力となっていたと思います。

先生はまた趣味も広く、陶藝、彫刻、音楽、魚釣り、野球、スキーなど多藝多才で、「昨日を悔いず、明日を恐れず、今日を楽しむ」がモットーでした。佐々木先生は音楽好きで、東海大学医学部学生の

オーケストラの定期演奏会で、「カルメン序曲」と「ラデッキー行進曲」の2曲を指揮者として指揮をとったことがあり、それが好評であったことを記憶しています。先生は「プロ野球の監督」、「連合艦隊司令長官」、「オーケストラの指揮者」は男のやってみたい仕事だと言うが、その中の1つをやらせて貰ったことに満足していた様でした。

先生は「ブーチャン」という愛称で多くの人達から親しまれ、人望がありました。私の90年の人生の大半を佐々木先生と共に歩んで参りました。数多くの思い出があります。いつでしたか先生の言われた言葉が印象に残っています。それは「美しくアレンジされた生け花よりも、野原に乱れ咲く花に美を感じると、これは正に先生の「共存の美学」というべきものと思います。

私も「科学と自然との共存」という先生のお言葉を常に心に秘め、かみしめながら残りの人生を生きて行きたいと思っています。

私の忘れることの出来ない恩師佐々木正五先生の御冥福を心からお祈りして、追悼の言葉を終わりたいと思います。

